2020年 世界飼料生産量
前年比1%の伸び

コロナ「影響した」58・5%
米国社調査

アフリカ豚熱から中国回復

米国に本社を置く飼料メーカーのオルテックは、2020年の世界飼料調査の結果を公表した。全世界の140カ国2万8000以上の飼料生産拠点のデータから、世界の飼料生産量は19年より1%増え、11億8770万トンと推計した。ブロイラー用や豚用飼料は伸び、肉牛用は減少した。調査対象の58・5%で新型コロナウイルスが原料供給に影響したと感じていたことも分かった。

国別では中国が生産量1位。次いで米国、ブラジルと続く。上位10カ国で世界の生産量の63%を占める。中国が前年の5%増、ブラジルが10%増など上位10カ国は平均2%の増産だった。

豚用では、中国はアフリカ豚熱の被害から回復して生産を伸ばしたが、フィリピン、ベトナムなどアジアの他の国が減産。アジア全体では前年と同レベルの水準になった。

採卵鶏用の飼料は、高病原性鳥インフルエンザ

ブロイラー用飼料はアジアや中南米で伸び、全年比1%増とみる。新型コロナで飲食店の閉鎖があり当初は需要が落ちたが、安価で調理しやすい鶏肉需要は家庭利用で挽回しているとみる。

乳牛用飼料の生産量は生産が伸びるなど、消費者が乳製品の製造方法に関心を示していることや抗生剤への規制強化の動きにも触れている。

肉牛用飼料は全世界の54%を生産する米国が増産し北米は2%増。アジアも中国がけん引し6%の増産を果たしたが、欧州で12%減るなど、全世界では1%の減産だった。新型コロナの影響でレストランが閉鎖された影響を指摘している。

ブラジルや南アフリカでは牛肉価格が上がり消費者が安価な代替品にシフト。経済情勢の悪化で

「養液土耕」で栽培マニュアル
8日にオンラインセミナー

スマート農業機器を販売するルートレック・ネットワークスは養液土耕システム「ゼロアグリ」の栽培マニュアルを作成した。8日にシステム導入を検討する農家へ向けてマニュアルを基にしたセミナーをオンラインで開く。

ゼロアグリは、土壌センサーや日射量などから情報を集め、自動でかん水と施肥をするシステム。「自ら考えて栽培管理をする」のが特徴だ。マニュアルは仕組みや栽培の流れ、設定の方法をまとめ、同社ホームページで公開した。2017年から3年間、青森県、山形県、熊本だ。

青森県では、夏秋トマトで慣行栽培と比較した。慣行では手動だったかん水を自動化し、かん水、施肥作業の作業時間は98%削減。施肥量も10アール当たり35・7キロから6キロと大幅に減った。山形県のメロン栽培でかん水の設定を検討。慣行区よりも果実は重く生育状態は良好だった。熊本県の干拓地で育てる促成トマトでも手法を確立し、20%の増収を確認している。

セミナーでは、ゼロアグリの機能や費用の他、実証で明らかになった効果などを詳しく紹介。チャットや音声機能で質問も受け付ける。参加は無料で、定員は先着100人。同社ホームページから申し込む。

問い合わせは同社事務局、フリーダイヤル(0120)50

私の経営

茨城県桜川市のイワセアグリセンターは、最高品質のソバ生産のため、早めの刈り取りと高い水分率にこだわり、風味を高める。真空アルミパックで包装して鮮度を維持する。水稲はもみ殻薫炭などでコストを下げる。地域の担い手不足に対応し、農地を荒らさず管理することを目標にする。

(岩瀬繁信)

◇

水稲、ソバ、麦を中心に、約150ヘクタールの農地で延べ280ヘクタールを作付ける。代表の菱沼英昌さん(81)は「ソバが一番の稼ぎ頭だ」と話す。ソバは80ヘクタールで栽培。県のブランド品種「常陸秋そば」を作付け、品質を高めるため、収穫時期と水分率を重視する。

茨城県桜川市　イワセアグリセンター　米、ソバ、麦

香り残し価値高める

製粉したそばの香りを確認する菱沼さん(茨城県桜川市で)

収穫早め水分率高く／「丸抜き」加工で販売

収穫時期は子実の色で判断し、黒い子実の割合(黒化率)で60~70%を目指して刈り取る。一般的な黒化率の80~90%収穫と比べて早く、そば粉は薄い緑色で、香りや風味が高くなる。

適期の刈り取りは課題だ。収穫時期の11月は、大豆の収穫や麦の播種(はしゅ)が重なって日没が早く、時間に追われる。ソバ収穫に注力するため、麦の播種を省力化する。2005年から播種前の耕起作業を省略できる「不耕起播種機」を導入。雨が降った後でも作業でき、効率的に作業できる。大豆や水稲の乾田直播にも使う。

作業の分散のため、麦の基肥施用は比較的時間に余裕のある1月に行う。一般的には播種前に行うが、播種直後は多くの栄養は必要ないため、遅い施用でも問題ないと考える。麦の収量は10アール当たり300キロほどだ。

収穫後のソバは、水分が16・5%になるよう乾燥する。一般的な同14%のそば粉と比べ、本来の香りが残り、しっとりとして、良いそばを打てる。水分率が高いとかびなどが生じやすいため、アルミパックで真空包装し、保冷庫で保存する。

「こだわりのそば職人に喜ばれ、ソバ産地の北海道や長野も含め全国40都道府県にお客さんがいる」と胸を張る。

早い刈り取りは収量が低くなるのが難点だ。10アール当たり収量100キロ以上を目指すが、少ない年は同40キロのこともある。

経営安定化のため、同社は08年から玄ソバの皮をむく「丸抜き」や製粉の加工を始めた。知り合いの業者が高齢で引退したのを機に、機械や販売先を受け継いだ。丸抜きは1キロ1000円以上で販売できる。製粉は石臼を使い、そばの組織を壊さずに粉にする。玄ソバを買い取りもして、年間100トンを加工する。

経営概況
■労働力=正社員14人
■経営規模=水稲60ヘクタール、麦100ヘクタール、ソバ80ヘクタール、大豆30ヘクタール、ジャガイモ7ヘクタール

◇　◇

水稲は一部で乾田直播に取り組む他、もみ殻薫炭の利用やプール育苗でコストを下げる。もみ殻薫炭は苗の培土に混ぜて使う。培土購入費を節約し、苗を軽くして作業能率を高める。健苗作りにもつながる。

薫炭作りは周辺地域への配慮のため、2年前に煙などが少ない炭化装置を約200万円で購入した。同社は販売する分も含め、苗を毎年約1万5000枚作る。培土のコストが1枚当たり約100円節約でき、採算が合うと見込む。

同社の経営面積は40年前の延べ30ヘクタールほどから、農業従事者の減少に伴い毎年増え続けているという。「農地をきちんと荒らさず管理することが目標」と菱沼さんは話す。

ネギハモグリバエB系統の発生確認

宮城県病害虫防除所

宮城県病害虫防除所は1日、仙台市と登米市の露地栽培ネギ圃場から、従来発生しているネギハモグリバエとは異なるB系統のネギハモグリバエの発生を確認したとして特殊報を発表した。同系統の確認は国内では24都府県目。

ネギハモグリバエB系統は、従来系統との識別は外観では難しいが、一葉に対して多数の幼虫が集中的に加害する傾向がある。

防除所ではネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に適用のある薬剤散布による初期防除の徹底と、薬剤抵抗性がつかないように薬剤を変えたローテーション散布を呼び掛けている。発生源となる被害葉や収穫残さを適切に処分することも指導している。

地土で、定植前に土壌pHが7・5になるように転炉スラグを植え溝に散布した。散布量は10アール250キロだった。pHが高いと微量要素が不足するため、水酸化マグネシウムも同25キロまいた。

9月上旬に定植し、10、11月に殺菌剤を2回株元に散布し、翌年3月に収穫した。転炉スラグをまいた圃場は、215本のうち1割ほどで発病した一方、まかなかった圃場は3割が発病した。

転炉スラグは、植え溝に散布しても全層散布と同程度の効果が得られるとみている。散布量はpHや土質にもよるが、pH6の未熟低地土の畑で